

無人駅の小屋 静かな人気

「自然な雰囲気がいい」「癒やされる」。市原市を走る小湊鉄道の月崎駅（同市月崎）にある「森ラジオステーション」が、静かな人気だ。地元住民が維持管理する苔むした小屋は森の中にあるようなたたずまいで、若者らが訪れる交流拠点となっている。



四季折々に変化し、多くの人が訪れる「森ラジオステーション」＝市原市月崎

小湊鉄道・月崎駅 芸術祭で森に見立てた作品

住民がおもてなし、若者ら集う

森ラジオステーションは山梨県在住の美術家、木村崇人さん（45）のアート作品だ。2014年春に市南部の里山で開催された「中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス」の際、小屋を森に見立て制作した。苔で覆われた外壁には約60種類の草花が植えてあり、四季折々に変化する。

無人駅の月崎駅のわきに建ち、かつて鉄道保線員の詰め所小屋として使用され



「人と森との関わりを考える場所にした」と語る木村崇人さん

ていた。木村さんが作品として彩ったことで、県内外から多くの家族連れや若者らが訪れるようになった。小屋を撮影したり、ぼーっと眺めたり。自然の雰囲気

化と高齢化が進み、地域活性化が課題だった。そこで住民自ら維持管理を買って出て、芸術祭閉幕の翌月に「森遊会」を結成。植物の手入れや草刈りを続けている。イベント時には飲み物を提供し、おもてなしも。当初6人で始めたが、現在会員は地元外の若者も加わり約40人になった。

映画「星が丘ワンダーランド」のメインロケ地にもなり、映画の世界観を求めに来る人も増えた。芸術祭実行委が春秋に実施している小規模なイベント「アートのいちほら」の会場の一つにもなり、この春、芸術祭が縁で結ばれたカップルが結婚式を挙げた。

会長を務める芹沢郁夫さん（75）は「高齢者がほとんどという地域に、若い人が来るようになり驚いている。芸術祭でまかれた種の芽が出て育ってきた。無理せず、楽しみながら活動を続けたい」と話す。

「人と森との関わりをテーマにした作品。様々な出会いが生まれたことが何よりうれしい」と木村さん。今月3、4日には木村さんの案内で植物をむしって食べるイベントもあり、参加者との会話が弾んだ。

「また来ます」……。感想がびっしりと書き込まれ、住民たちの「元気の源」になっているという。

そんな森ラジオステーションを守っているのが、地元の人たちだ。芸術祭終了後に撤去される予定だったが、住民から「残したい」と声が上がった。

芸術祭は来春の開催が決まった。「人が集い、変化していく場所に育てば」。木村さんも、森遊会も、森ラジオステーションの成長を楽しみにしている。

（石平道典）